

相偕に携へ來り議を定む。

是に於て阿正を呼び、事の由を告げ、利害の在る所を説き、慰諭百方至らざるなし。正之を聞き默然として、良久しく答へざりしが、徐かに頭を擡げ、襟を正して曰く。諸君子の妾の爲に計り給ふ所、誠に徳とし荷はざるにあらざるも、父か歿するに臨み妾を召し、撫して長二郎に許されし。慈心屬する所、心肝に徹して忘るゝなし、敢て背くべきにあらざるなり。何事も、妾の能ふ所は唯命のまゝなるべきも、此の一事は獨從ふこと能はざるなりと。言ひ了りて潸然、涙、襟を濕はす道全等之を聞き、大に怒をなして曰く、吾か輩唯御身の爲に計るのみにあらず、事成れば、克く御身の義父を利用のみならず、施て吾が輩に至る迄、與に榮耀有らんとすればこそ、斯くも詞を

盡すなれ。此の洪福を捨て、落魄の長二郎を慕ふは、何の考ふる所あるかを知らざるも抑も顛倒の甚しき者にあらずやと。嘉右衛門亦頻りに罵て曰ふ、汝執拗、此の婚を肯せざるは、我れ其の故を知れり、意んに、已に密に長二郎と相通するに非ずや、不義者！我れ必ず汝等二人を放逐せずんば止まずと。

阿正涙を飲み頭を垂れて、終始敢て復一言を發せざるなり。(未完)

祇園梶子の話

上野紀士

梶子といふ女は、京都祇園の鳥居の南側なる水茶屋に、うまれましたものでありますから、祇園梶子といひます、家柄のいやしきには、思ひもよ

らず、心ばへの和かでみやびやかなるものであり  
ました。幼少の時分からして、父母にはよく孝行  
をいたし、家業にも骨を惜まずに、勉強いたしま  
した。

祇園は名高い繁昌な場所でありますから、仕事  
が此の上もなく忙しうござりましたが、生れ付き  
てのすきでありますから、少しでも隙間さへある  
ならば、草子とか、歌の集とか、物語の本とか、  
なにくれとなく、よみ習つたので、だん／＼歌と  
いふもの、味を覺ゆるやうになりましたから、せ  
めて歌らしきものなりと、自分でによみたきもの  
よと、心がけて居りました。

幸福なことには、田舎などは、事がちがひて居  
りますから、やさしき婦人、みやびたる男子、學  
者、風流人らが、たまさか立ちよりてきまして、

紙ぎれなどに歌を書き付けて、木の枝とか、かき  
のはしとかに結び付けたり、又はくち／＼に面白  
くかかしげに、歌ひあひ、詠みかはす有様を見た  
ならば、飛び立たんばかりに喜び、うやく／＼しく  
その人々に向ひて、歌の作り方などを尋ねました  
がすきこそ、物の上手なれといふ諺のごとく、い  
つ悟りたりといふことなしに、遂に三十一文字の  
情合を知るやうになりました。

これより後といふものは、春の花の美しきを見  
ては、思をこらして筆をそめ、月の光の澄めるを  
眺めては、首をかたむけて硯をひきよせ、夏の夕  
の涼しさには、朝顔のにはひを夕顔によみくらべ  
冬の朝の静なるには、霜のかもむさを雪に歌ひあ  
はすなど、しきりに風流の方に、ふかく心がけて  
居りましたので、だん／＼上手になりまして、年

わづかに十四の時には、歳暮戀といふ題にて、

こひくゝて又ひとせも暮れにけり

涙のこほりあすや解けなん

といふ一首を作りました。この歌は名高いものでありますので、今でも人々の口のはに上るのであります。

梶子の心がけは、この通りでありますから、その姿色香も心につれて、やさしくしとやかにになりました。それゆゑ、みやこ人と田舎人との別ちなくわれもくゝと尋ね来るやうになりましたから、家の繁昌はいふに及はず、由緒ある人まで、文などを贈りて返歌を求むるやうに至りました。

これから後といふものは、京都や近國人はいふに及はず、西は九州のはて、東は奥州のはとりの人々まで、茲に遊ぶ時は、その歌を貰ひ受けて

これは祇園の土産なりと吹聴するに至りましたので、何人がいふとなく、その評判がおひくゝ廣まることとなり、はでくゝは雲の上にまで、召し上げ聞えさせられたる歌ができました。その歌は蔽といふ題にて、

雪ならば梢にとめてあすも見ん

よはに霞の音のみぞして

といふ名句なのであります。又その外にて名だかいは、仙洞おんかくれありし時、おんくやみ申し上げ奉りたる歌なのである、

およびなき雲の上なる哀れさを

天が下とてぬるゝ袖かな

といふ一首であります。氏もなき家に生まれながら、かしこき御あたりのやさしきためしに、聞え上げらるゝとは、ひとへに和歌の徳とこそいふべ

きものなれ。

この通り梶子の評判が、高くなりまして、寶永時代の大呼物となりましたが、遂には梶の葉といふ家集まで遺して、後の世の人々の玩び草となりました。梶子は又誹諧にも書をかくことにも上手でありまして、百合子の母に當り、池野大雅堂といふ有名の書かきの女房町女の祖母にあたりて居ます。この二女子も有名なる文人であります。その事は後日折ができましたならば、お話することにいたしましたしよう。

名 の リ ケ リ

抑 此 れ は

秋 の 月



文苑

山家月

秋の夜の月のひかりはきよけれど  
水野忠敬

わかやまごとは訪ふ人もなし  
諏訪忠元

何處にて見るも同じきつきかげの  
ことさらすめるやまざとの月  
相澤木

雲霧をはらふ軒端のやまかぜに  
小ざゝさやきて月いでにけり  
赤堀信成

山をいでし賢き人にすてられて  
木こりの軒にすめる月哉  
矢田香圃

四十五